

精霊流し

香取 淳じゅん

一、

ヒューババツ、ヒューバババババツ……

耳をつんざく爆竹が上空で作裂しています。ついこの間ま

で先生が教壇に立たれていた学舎まなびやの前庭に、大勢の教え子た

ちが集りました。皆、揃いの白装束に白足袋、法被はつびの背には

先生のお名前が、黒く染め抜かれています。屋形船に車を取

り付けたような精霊船しょうろうぶねの舳先へびきに飾られた大きな遺影。その

表情は厳しくそして穏やかで、今にも闊達かつたつなお声が聞こえて

きそうです。枯木のように痩せ細った奥様も喪服姿で、少し
離れた渡り廊下から御船を見護まもっておられます。遺影の下の

香炉こうろに立てられた線香から薄い煙が立ち昇ります。

ヒューツバババババツ……

白亜の校舎のあたりで、灰色の煙と乾いた音が鳴り響きま
す。先生の研究室で助手をしている同期のSが、耳栓をした
らいいと脱脂綿を手渡してくれました。彼等の仕草を真似て、
私も丸い耳栓を作ります。耳の奥にそれを押し込むと、爆竹
の音はずっと小さく微かすかになりました。まだ静かな今は、耳
栓は軽く挿しておきましょう。

ヒューツバババババツ、ヒューヒューババツ……

爆竹が一段と激しく鳴り、やがて船がゆっくり動き始めま

す。前から手綱を引く者、後から押す者、私も脇から船縁ふなべりを

押していきます。白足袋の足がとても軽くて、地面の感触が

直に伝わってきます。幾棟かある校舎の間を、白装束の人群

とその真ん中で精霊船が、揺れて進みます。夏休みで学生の
姿がない教養のキャンパスに入ってきました。ヒマラヤ杉や

プラタナスの幹が随分太く立派になって、真夏の葉を青々と
茂らせています。私が入学した時、もう二十年も前になるあ

の頃は、どれもか細い幼木ばかりでした。このキャンパスは
兵器工場の跡地で、爆心地からは一キロほど離れています。原
爆の投下目標にされた所だと聞きました。私より十数年も
前に来られた先生は、ここで何を見られたのでしょうか。きつ

と幼木はおろか、草も生えない焼けあとだったに違いありません。

二一

大学の正門が近づいてきました。円い池とその畔に立つ数本のシロの木もビククリするほど丈が高くなり、尖った葉を空一杯に拡げています。正門脇のボックスから守衛が二人、先生の御船を見送りに出てきました。彼等の前を通り過ぎ、電車通りを左に折れて、道路の端を南に下ります。

「ドードー、ドードー」

低く静かな掛け声があちらこちらから聞こえ始めます。まだ時間が早いせいか、私たちのほかに精霊船は見当たりません。脇を車や路面電車がゆつくり通り過ぎて行きます。それがひどく静かに感じられるのは、運転手の気配りでしょうか。それとも、軽く挿している耳栓が利いているのでしょうか。

私は歩を早めて香炉を覗きました。線香が随分短くなっています。私は手を伸ばし、線香を数本取り出して火をつけました。それを揺れる香炉に苦心して立てました。夕陽を浴びた先生のお顔が揺れた一瞬、唇が少し緩んで笑ったように見えました。

先生、今日は私はずっと、この線香の火を絶やさないうようにいたしましょう。

初めて先生にお会いしたのは、私が十九才の春のことです。専門の薬学には凄い教授がおられると噂に聞いておりましたが、全くその通りでした。体型はずんぐりで少し猫背気味ですが、その声は講堂の壁がビリビリと震えるほど大きく、歯切れがいいのです。どこか京言葉に似た長崎弁の中で聞くべらんめえ口調は、信州からやって来た私の耳に一段と快く響きます。専門用語を駆使しつつ、黒板が横文字と化学の反応式でみるみる埋ってゆきます。それを眺めて、「なる程これが大学教授と云うものか」と感心しましたが、講義の内容はさっぱり理解できません。

しかし、先生のお話はすぐに脱線して、誰にでもよく分かる話に変わっていきます。その話題はとても豊かで、私たちを引き付けました。あるときは政府の政策や政治家の言動、あるときは社会問題等々、何がとび出すか分かりません。おびたらしい数のそれらについて、いま思い起こすことは到底できません。が、一つだけ鮮明に残っている言葉があります。「唯、犬や猫のようにこの世に生まれて死んでゆく者より、何か新しい真理を発見したり発明したりできる人はずっと幸福であり、その人生は素晴らしい……」

肩から少し力を抜いて静かに話されたのは、新学期から間

もない、梅雨時のことだったように思います。

話は少し変わりますが、入学式後のオリエンテーションのとき、身上書が一人一人に配られました。本籍地や出身高校、家族構成等を記入するもので、何の抵抗もなくスラスラと書けることばかりです。しかし、『尊敬する人』の項目で、私の筆は躓つまずきました。身近に尊敬する人がいなかった私はそこ

を空欄にして次に進みます。しかし受験勉強の名残なごりでしょう

か、空欄を残して提出することがひどく躊躇ためらわれ、そこに次のように書いたのです。『ヒットラー(但し、その行為は憎むが)』私は、一人の人間が大きく歴史を動かした、その巨大なエネルギーに驚嘆していました。ですから素直にそう書いたのです。

幼いときから私の周囲の人たちは、誰もが無気力で寡黙いさかでした。特に父と思っていた人との諍いさかの後は悲しいことばかりです。忘れもしません、中学一年の秋のことです。その人に何か口答えをしたのでしようか、いきなり拳骨が落ちてきて、頭が割れるほど痛いのです。

「この出来損ないのクソ餓鬼、お前の面倒などもうみられん、

どこへでも出て行け！」

私は涙に滲にじむ目でその人を見上げました。何故そんなに強く殴られなければならないのか、訳を知りたかったのです。しかしそこには、憎しみに燃えた目しか見いだせません。そして子供心に、その人が自分の父ではないことを、はっきり読み取りました。私は即座に家を飛び出しました。行く当てもなく、何処までも田舎道を歩き続けます。すぐに日暮れて寒くなり、腹も空いてきました。しかし、どうする術もなく、幼い私は歩き続けます。そして疲れきった私は、道端の農家の納屋で倒れてしまいました。翌日その農家の人に発見され、家に連れ戻されます。しかし、私はもう家で口を利くことはありませんでした。母と男との間に喧嘩が一段と多くなり、それは日増しにひどくなつてゆきます。

ある日、男に殴られ泣き伏している母の手を引き、私はその家を出ました。隣の叔父のところにはしばらく身を寄せた後、小さな家を借りて、母との二人住いが始まります。戦後の貧しい時代でしたから、女が一人で生きてゆくことは難しかったのでしよう。母は何度か仕事を変えました。しかし、結局は夜の水商売に落着くほかはありませんでした。その新しい生活が始まって間もなく、母は黄ばんだ古い写真を取り出してきました。

「捨ててしまわないでよかった。これがお前のお父さんだよ」
そこには、軍服に身を包んだ細面の青年が写っていました。

その父は、私が生まれて間もなくサイパンで玉碎ぎょくさいしたのだ
そうです。その小さな写真を額縁に入れて箆笥の上に置いた
母は、気が向くと熱い茶や菓子を供え、手を合わせていまし
た。そして母より背が高くなつた私を眩しげに見上げ、「お前
はだんだんお父さんに似てくるわねえ」とよく言つたもので
す。

町の中学には十数人の教師がおりましたが、誰も生気があ
りませんでした。生徒も私のように片親の者は珍しくなく、
父親がいても病気がちであつたり、全く働く意欲がない親も
いたりして、特別私だけが不幸だとは感じませんでした。そ
れでも、辛い日がなかつた訳ではありません。夜更けの玄関
にドサツと音がして、眠い目をこすりながら出てみると泥酔
した母が倒れています。声を掛けても目を醒まさない母の靴
を脱がせ、座敷に運びます。苦心して布団に寝かせた母の化
粧崩れた顔に、ポタポタと私の涙が落ちます。それを掌で
拭いながら、「もしこの世に私が生まれてこなかつたら、母も
これほど辛い思いをしなかつたのに……」と思うと自分がた
まらなく惨めで、このまま母の細い首を締めて私も死のうか
と
思つたことが、何度もありました。

高校に入っても状況は余り変わりません。誰もが生活に追
われ、無気力で、影絵のように頼りなく感じられます。しかし、
唯一人だけ英語の教師が違っていました。彼は授業の合間に
目を輝かせ、「青年は理想に燃えて生きよ」と説きました。「胸
のワイドスクリーンに大きな夢を描き、その夢に向かつて果
てしなくチャレンジすること、それが青春だ」と熱く語る彼
に期待して、私は英語の時間が楽しみでした。しかし、何度
もなんども同じ話を聞くうちに、『彼はアルコール中毒に違
ない』という周囲の噂を信じるほかはないことに気付きまし
た。

その頃から、私は煙草や酒を覚えました。家に母が殆んど
いないことを良いことに、毎晩悪友たちを集めては酒を飲み、
カードに夢中になりました。突然、何時もより早く帰つてき
た母に咎められ、友達の下宿に場所を移します。そして、朝
まで遊んだことも数えきれません。

春から秋にかけては過ごしやすしい信州ですが、冬になると
ひどい寒さが襲ってきます。氷が張つた田や湖はもとより、
急流までもが凍つてしまいます。丁度、車のボンネットのよ
うに複雑な曲線を織り成して川面が凍結するのです。地表の
ありとあらゆるものが氷に閉ざされた世界で、私の心もまた
冷え切っていました。

『折角この世に生まれてきながら、このまま生きた証も掴む

ことなく終わってしまう人生でいいのか?」

そのような自問自答を繰り返したのは、二年生の冬のことでしょうか。翌年の夏休みには悪友との交際を絶ち切ろうと考へ、私は東京のゼミに通います。長い間勉強から遠ざかっていましたから、ゼミの講義にはついていけません。しかし、秋になって郷里に帰ると、ようやく勉強に集中できるようになりました。

再び寒い冬がやってきました。炬燵こたつの暖だけでは安普請の借家の寒さにはとても耐えられません。大きな湯呑に絶えず熱い茶を汲み、身体の内側から温めながら勉強したものです。そのような勉強の合間に受験雑誌を繰りながら、私は南の方に心ひかれていきました。酷寒の谷間を飛び出して、緩かい

町こゝで凍えた私を温めたい。そこで生まれ変わって、納得のいく幸せな人生を送りたい。そう願いながら、私は志望校を決めていったのです。やがて陽射しが強まり氷も融ける頃、花模様で縁どられた電報が寒々とした私の部屋に届きます。半ば諦めていただけに、花の凶案がとても綺麗に見えました。合格通知を手に、私は丸一日汽車に揺られて長崎に向かいます。終点が近づくと、窓外に真青な海が見えてきます。時折トンネルに入ります。窓の隙間から煙が吹き込んで、喉や

鼻を刺激します。その息苦しさから抜け出ると、なだらかに湾曲した海岸線と湖のように静かな海が一段と爽かです。さらに幾つかのトンネルを潜り終えると、突然別世界のような町に入って行きます。このとき以来、私は何度もここを通っています。その都度、別世界に來たように感じられる光景は変わることがありません。そして、そこで出遭った先生は、

何時も生氣に満ち溢れ、荒野に咲く大輪の牡丹のように凛りんとしていました。それまでに私が見てきた人たち、頼りなく影の薄い人々とは違い、先生は輪郭がはっきりしているのです。明確な己の信念を持った、魂のこもった人間のように見えたのです。それが何故なのか? 私には分かりません。しかし、ほかの人とは異なる何かをお持ちだったことは確かです。

三、

先生と直じかにお話する機会は、翌年の春にやってきました。そのきっかけは全国に勃発し始めた大学紛争でした。五月半ばの未明に、教養のキャンパスに機動隊が入ります。新設された学生会館の管理運営規約を巡って、大学と学生が前から対立していました。何度か協議の場は持たれましたが、歩み寄りは見られません。痺れを切らせた大学側は、連休が明け

て十日ほど経った午後、一方的に規約を可決してしまひます。その評議会の議場を、学生がとり囲みます。議決を撤回して、学生の意見を採り入れるよう、代表が申し入れました。しかし、評議会は一切これには応じず、やがて夜を迎えます。数百名の学生は次第に興奮して、会議場を幾重にも取り囲みます。そして、激しいシユプレヒコールとジグザグデモが渦巻きます。話し合いの糸口も見いだせないまま、いたずらに時だけが過ぎていきます。やがて、忍耐の極に達したのです。夜更けに学長は機動隊の出勤を要請して議場からの脱出を図ります。武装した沢山の隊員に守られて、彼等は逃げのようにキャンパスを去って行きました。

深夜の構内にとり残された学生たちは、怒りに燃えて集会を開きます。すぐに、その日から授業放棄に入ることを決議して、夫々の学部に行きました。

学生たちの強硬な戦術に対して、大学側も黙ってはいません。授業放棄から二日後に、数名の学生の退学処分が掲示板に告示されます。それを見た学生たちの怒りは頂点に達し、大学本部の木造の建物を揺るがすような激しいデモが、連日繰り返されました。

全学集会やデモがない場合、学生たちは夫々の学部に戻って集会を開きます。学部の委員であった私は、毎晩遅くまで数人の委員仲間と討議を重ねます。評議員であるT学部長に

面会して経緯を質したり、大学側の見解を求めたりもしました。

この激しい紛争の最中に学部長の改選があり、先生が新しい学部長に就任されました。確か六月一日付でしたから、機動隊の導入から二週間後のことです。先生は、前任のT学部長とは違って何時でも会って下さいましたし、何を尋ねても明快に答えて下さいました。紛争の火種となった学生会館の運営について質問したときも、そうでした。

「共産主義だろうとマルキシズムだろうとよオ、学生が何を考え、何を討論しよう、それはかまひやしねえよオ。そういうことも含めてだよオ、自由にものを考え、研究するところが本来の大学のあるべき姿なんだ」

口角泡を飛ばすその勢いは、私たち学生を上まわるほどです。「紛争の真の原因は、学長や評議會を陰で操る文部官僚の仕事ではないのか」という左翼学生の質問にもほぼ同意されて、大学の奥深くまで介入する中央権力に対する嫌悪を隠そうとされません。熱く語る先生の瞳はらんらんと輝き、それを見た私は、先生はアナキストに違いないと思いました。同席した委員は、「新学部長としての学生に対するポーズだよ」と言い切りました。しかし、私にはどうしてもそのようには思えません。そして「ここだけの話だがなア」と前置きをされて、学長の考えや、紛争の今後の展望について話して

下さいました。

先生が学部長に就任され、評議員を兼ねるようになるのと相前後して、事態収拾委員会が作られます。委員会は、各学部の学生代表一名と大学の評議員で構成され、事態の早期正常化を図ることが目的です。学部代表に推された私は、この会の往復時に、先生と話をする機会に多く恵まれました。一時も早くまともな学園に戻したいと願う心は、一緒です。私は自分を包み隠すことなくぶつけました。先生も「ここだけの話」と前置きをされては、大学側の真意や先生御自身のお考えを話して下さいました。

ある日の、新学部長を招いての公開討論会でのことです。討論が大分進んだ頃、私は手を挙げて質問に立ちます。

「大学側の考えは、今までの話で少し分かってきました。聞くところによると、学生の退学処分について、大学側はこれを撤回しないものの再入学を認めるといふやり方で、実質的に解決する考えがあるように聞いております。退学処分の実質的撤回が可能であるならば、学生会館の規約についても……」。

「てめえ！ いま言ったその言葉、一体何処の誰から聞いたーッ」

私の声は決して小さくありません。しかしそれよりも遙かに大きな罵声が、数十人の学生の頭上を越えて、私の胸に突

き刺さってきました。私は口を噤みます。先生は、怒りに肩を震わせ、教壇をゆっくり降りてこちらに近づいてきます。何故なのか、私にはすぐ分かりました。

「今の話は、前学部長のT教授から聞いたものです。先週の学部長会見の折にT先生よりはつきり聞いたものでありません」

その言葉に先生は小さく頷くと、腫を返して教壇に戻られました。

連日の集会で、私たちは誰もが疲れていました。四年生は、卒業が困難になるとの理由で授業を再開しています。これまでは滅多に出なかつた反対意見や、「一時も早く授業を受けたい」という発言が増えていきます。何時の間にか常任の司会者に祭りあげられていた私は、司会の立場を逸脱して、彼等を説得し続けます。集会を終えた夜は委員会室に、学生の心理状態や大学の動き、闘争本部からの指令等の情報が集められ、遅くまで会議が続きます。翌日の集会場所、進め方等細部が取り決められると、もう夜中の一時か二時、ひどい疲れが、会議を余計に長引かせていたのかもしれない。紛争が三週を過ぎる頃、私たち委員は自宅に帰る気力も失い、隣の集会所の窓ガラスを打ち破り、その畳で眠るようになりま

す。ある晩は窓枠を乗り越える余力もなく、固いベンチに長く伸びました。すぐに目蓋が閉じて、深い眠りに落ちてしま

います。夜更けに寝返りを打ったのでしよう。ドタツという音に、己が落ちたことを微かに意識します。しかし、這い上がる気力はありません。床油と砂埃の板張りの床に頬をつけたまま、夜が明けるまで眠りました。そんな日でも、朝になると容赦なく学生が集まってきます。一ヶ月近く口を閉ざしていた学生も、もう黙ってはいません。理屈はどうであれ早く授業を受けさせてくれと、強く迫ります。私は司会者の義務感で、唯ひたすら「ここで止めてはいけない」と様々な理由を並べたて、彼等を説得し続けます。しかし、一時も早く紛争から解放されなかったのは、それらの学生以上に、私自身だったのかもしれない。ついにある日の夕方、幾ら頑張っても、反対意見を抑えられない時がやってきました。

「議論はまだ尽きませんが、陽も暮れました。ここで採決を取りたいと思いますが如何でしょうか」

私は後列に陣取った委員たちの顔を見ました。彼等も頷いているようです。

「それでは採決に入ります。いままで通り授業放棄を続けるべきだと思う人は、挙手を願います」

勢いはありませんが、沢山の手が挙がったように思われま

す。
「有難うございました。それでは次に、理由はどうあれこれ以上続けるべきではないと思う人、手を挙げて下さい」

疎らではありますが、スルスルと幾つかの手が上がりました。

「正確に数えますからそのまま挙手をお願いします」

私は立ち上がり、講堂の隅々まで丁寧に数えました。そして椅子に掛け直し、大きく息を吸います。

「ただいまの採決の結果、反対が十五名ありました。改めて申すまでもなく、授業を受けることは私たち学生の基本的な権利です。従って授業放棄の決定は全員一致でなければなりません。多数決で決めることは許されないことであります。

この様な考えから、昨夜の委員会では反対が二割を越えた時は闘争を終結することを申し合せております。ただいまの採決の結果、反対が本日ここにお集りの方の約二割に達しました。従って、本日この時をもって、授業放棄の終結を宣言します」

ウオーと地響きに似た歓声が起こりました。憔悴しょうすいしき

った学生たちの顔に血の気が戻ってきます。手に手をとって喜びあう女子学生も見えます。私も全身から力が抜け、フラフラと壇から降りてゆきました。

「この決定を早く先生に知らせよう」

「そうだ早く知らせなければ明日の授業が受けられないぞ」
それらの叫び声に、私は再び壇に駆け上がります。

「ここで提案があります。今回の闘争のしこりを後々まで残さないように、そして明るく民主的な学園の創造のために全学部集会を開いてはどうでしょうか」

大きな拍手が湧き起ります。

「それでは明朝九時に、この会場で、この薬学に集う総ての者の集会、全学部集会を開きます」

早速手分けをして、電話掛けが始まりました。番号の分からない職員は、分厚い電話帳を繰って調べます。その作業が一段落したとき、私はふと、何かが足りないことに気づきました。周囲にいるのは闘争継続に反対して、説得に苦心してきた友ばかりです。一緒に闘ってきた委員の顔が、一人も見えません。私は彼等を探しました。彼等は暗い中庭の芝生で円座を組んでいます。私は近づき声を掛けました。しかし、どうしたことでしょう。それまで熱心に話をしていた彼等が口を噤み、そつぽを向いてしまいました。私は次の言葉を見出せないまま、そこを離れました。そして、彼等が何故冷やかな、敵意さえ含んだ目で私を睨むのかを考えました。しかし疲れ切っている私には、その時の彼等を理解することができませんでした。

翌朝は学生と教職員、大学院生や研究生に至る学部の全員が講堂に集まりました。準備された式次第はありません。先生と私が代わる代わるに話し合つて、円満な解決に漕ぎ着

けました。しかし、裏ではまだ多くのことが燻ぶくすっておりました。あの日も狭い委員会室で、夜遅くまで激論が続いたのです。全学共闘委員会から戻ってきた友がいきなり私に激しく言いかかります。

「何でお前はあんな独断をやったんだ！ ほかの学部は今でも必死で闘っているんだぞ。身勝手に統一を乱す奴と、俺は散々批判されてきた」

突然の攻撃に、私は一瞬ひるみました。しかしすぐに気を取り直して言い返します。

「何で君は僕一人がやったようなことを言うんだ。反対が一割を越えたら止めようと前の晩決めていたんじゃないや……」

「俺達は一割を越えたら考え直そうと言っただけだ。誰が即刻止めるなんて言っただけだ！」

私は妥協することなく議論を続けました。後で冷静に考えると、彼の言い分が正しかったのかもしれない。しかしあの決定的な瞬間、私の心底にある願望、一時も早くまともな学生に戻りたいというそれが、無意識のうちに私をあのようにならせたのでしょうか。それに最後まで争点になっていた学生会館規約の問題も、大学側に手直しの用意があることを先生から伺っていましたから、もはや苦しい闘争を続ける理由が私の内には何も無くなっていたのです。

私たちの学部が正常化して数日後、ほかの学部もすべて闘争を終結しました。そして、総括集会が開かれることになりました。私は委員たちから激しく批判される一方で、穏健な学生からは強引に闘争を進めた者として疎まれていました。私はその孤立に耐えられず、先生のお部屋によくお邪魔したものです。

「お前のやったことは間違っていない。ベストに近い行動をとってきた」

先生はそうおっしゃって私を何度も励まして下さいました。そして、総括集会に行こうと腰を上げた私に、強く言われました。

「お前の言い分は正しい。しかし、幾ら正しくても暴力はいかん。絶対に暴力はいかん。もし暴力沙汰になりそうなどときにはすぐに逃げろ。必ず逃げて帰るんだぞ！」

私が頷き、小走りに集会所に向かうとき、先生は大声で何度もそう叫びながら何時までも見送って下さいました。

四、

卒業前の一年間は、文科系の卒論に相当する特別実習があります。十幾つかある専門講座のどこかで一年を過ごすのですが、勿論私は迷うことなく先生の研究室を選びました。そ

の研究室に入った途端に、耐え難い悪臭が鼻をつきます。与えられた実験台を前にしたものの、慣れ

ない実験は遅々として進みません。それに自治会の委員は引退していましたが、難問が起こる度に後輩が呼びにきます。それをいいことに、私は意気揚々と研究室を出ていきます。そのような毎日が半月ほど経ったときでしょうか。

「てめえーッ、やる気あるのかーッ」

戻った私に、鼓膜が破れそうな雷が落ちてきました。

「勿論ありますよ。やる気がなかったら、学校になんか出てきません。大体、大学は義務教育ではないんですからねッ」

先生の雷に面と向かって口答えした学生も、多くはあります。先生は当惑した表情で、コンクリートの床を蹴り、腫を返します。その後も、私はたびたび先生に大声で叱られます。が、その都度負けずに言い返したものです。

幼い頃から大人であることを強いられた私は、精一杯突っ張って生きてきました。中学生の時から、家の力仕事は全部私の役目でした。周囲の大人たちは誰一人助けてはくれません。損得勘定にのみ狡く、腑抜けな大人たちを、私はむしろ

軽蔑していました。ですから先生に怒鳴られても、素直に聞くことができなかつたのだと思います。しかし、先生に叱られた夜は、胸に手を当てよく考えました。先生のお言葉は確

かに正しくて、反論する私のそれは屁理屈に過ぎません。固い殻に閉じ籠った未熟者の自己弁護にすぎません。そして、そのような思考を何度も繰り返すうちに、私は次第に自分を厳しく、客観的に見られるようになってゆきました。そうすると、もはや先生に口答えをすることなど到底できる訳はありません。

その後も実験台の引出しにきれいに洗って乾燥したガラス器具が一杯詰まっていなくて、罵声を浴びました。「これは」と訊ねられた実験の手順をうまく答えられないと「何やってんだよおーッ」が飛び出します。私がやった実験に納得がゆかないときには、先生が自ら私の丸椅子に掛けられます。そして、先生が同じ操作をおやりになると、私では全然駄目であった反応が、嘘のようにうまくゆくのです。そのようなとき、「先生は凄いなあー」と私は心底から思いました。恐らく先生には、現象の下の見えない世界を洞察し、見抜いてしまう力があるようです。

「自分勝手な色眼鏡で物事を見てはいけない。物事はありのままに見ること。白いものは白、赤いものは赤と見なくてはな」

そんなとき、よく教えて下さったお言葉です。

実験が順調に進みだし、初夏に入った頃から新しい化合物が次々に生まれてきました。化学のことはほとんど知らない

私です。ただ、先生に言われるまま、教えられるままに夢中でやってきました。そのような私でも、化学の面白さ、素晴らしさを味わうことができました。そして、学問というものは教科書を覚えることではなくて、それには書いてないことを発見したり、世の中にはまだ存在しない物質を新たに創り出したりすることと知りました。

先生は化学だけに留まらず、遊びもよくなさいました。夕方方の五時には必ずと言ってよいほど教授室の真ん中に麻雀の卓が置かれ、そこは雀荘に急変してしまっています。私たち教室のメンバーだけではなく、下級生たちもやってきます。三つある実験室の何処かで雷が落ち続け、本業の研究が凄い勢いで進む一方で、雀荘も大繁盛です。化学には全く関心がないものの、麻雀がしたいばかりに入ってくる学生も先生は拒みません。個性豊かな学生たちを別け隔てなく迎え入れる教室は、さながら梁山泊の様相を呈していたのです。

その麻雀は、実に賑やかです。メンバーの一人が少しでも牌を切り遅れると「ダアダアダアダア」とか「オー、誰か週刊誌を持って来てくれよう」という大声が絶えません。そしてゲームが終り、「腕はいいんですがね、先生がプレッシャーをかけるから、今日はその声にやられました」と学生が言えば、「何を言ってるんだよオ、もっと腕を磨いて、俺にまいったと言わせてくれよ。ウワツハハハツ」と豪快に笑いながら、

一緒に後片づけをされたものです。

しかし、その後で一人廊下を帰ってゆかれる先生を、あるとき見かけました。そのときの先生のお顔は、寸刻前の豪放磊落^{らうしやく}で、はったりや冗談を飛ばしていたときは打って変わり、ハツとするほどに厳しいものでした。それから何度か、同じような先生をお見かけしました。小さな靴音を響かせて、暗い廊下を去ってゆく先生の猫背気味の背中に宿木^{やどりぎ}のようにしつかりと根を張った淋しき、あの孤独と寂寥はいつたい何なのですか。

五、

先生の教えを受けて日ごとに自分が変わってゆく夏の日に、私は決定的な体験をしました。幼い時に母と共に身を寄せていた叔父、その頃は市中病院に勤務していた彼が開業して、順調に事業を伸ばしていました。そしてその春に、三百床余りの病院を開設したのです。母の勧めや将来のこともあり、私はその病院の薬局でアルバイトをしました。

しかし、私は薬局の仕事に全く魅力を感じませんでした。

調剤は、殆どが錠剤かカプセルの処方箋で、ただ数を数えて袋に入れるだけの単純作業です。午後になると、大きな鞆を抱えた製薬会社のプロパー（医療用医薬品の営業マン、現在の呼称はMR）が何人も押しかけてきます。そして、薬局長を相手に盛んに媚を売りながら、自社薬の購入を迫っています。

それに比べて医師は精力的で、誰もが病院の中核となって働いていました。私が手押し車にブドウ糖やリンゲル液を積んで病棟などに配って歩くとき、多くの場面で医師たちに出会います。詰所でカルテに目を通している彼等は真剣で、白衣の背中にまで緊張感が漲^{みなぎ}っています。病棟で診察しているときは優しく、患者は彼等を尊敬しきった目で見上げます。急患に付添ってきた家族、不安と焦燥の彼等に病状を説明するときには、威厳に満ちていて、彼等の言葉の一つ一つに家族の表情が穏やかになってゆきます。それらの姿を毎日目のあたりにして、私は自分がなろうとしている薬剤師の仕事に疑問を感じるようになってゆきました。自分の天職ではないように思えて仕方がないのです。

夏が終り長崎に帰ってきてても、その思いは変わりません。むしろ、日が経つにつれて、その疑問は膨らんでいくばかりです。実験台に向かっても心は虚ろで、以前のように集中する

ことはできません。一ヶ月余り思い悩んだ末に、私は母に手紙を書きました。

母はその頃には自分の店を持ち、経済的に少し余裕がでていました。その母は、もう一度やり直して医師になりたいという私に「存分にやりなさい」と返事をくれました。私の心はその一言で決まります。そして、そのことを先生にお話ししたのは秋も終りに近い頃だったでしょうか。

しかし、私の話に先生は真向うから反対されました。

「医師も立派な仕事だがなあ、お前。薬剤師だって医師に劣るものではないぞ。仮に調剤やプロパーが詰らないとしてもだなあ、ほかに研究や教育職、さらに公衆衛生の仕事だってある。もつと柔軟に考えればな、道は幾らでも開ける。折角、ここで四年間も学んだものを無にするのは余りにも無茶だ！」

確かに先生がおっしゃる通りかもしれません。しかし、私は故郷から遠く離れた長崎の地に、新しい自分を求めてやってきました。そして先生に巡り会い、今まで知らなかった自分や見えなかった世界を知ることになりました。その『生まれ変わった自分』が医師になることを

心底から望んでいるいま、やり直すしかないように思われます。このことを何度話しても、先生は頑として私の考えを否定し続けます。

「何と言つても先生、医者つて恰好いいですよ。たくさんの患者が神様を崇める^{あが}ようにやって来て、彼等の言葉の一つ一つに頷いている姿を見て、本当に生甲斐のある職業だと感じましたね。人の幸福のために生きるって、本当に素晴らしいですよ」

「なあお前、それじゃ薬学をやっている人間は人の幸福に役立つていねえつて言うのかよお」

「そんなこと言っているんじゃないやありません。ただ、毎日そういう実感を味わいながら生きられることは悪くないじゃないですか」

「何言つてんだよお、てめえは人助けして自己満足することがいいことだつて言うのか。そういう奴はなあ、偽善者つて言うんだよ。自分より弱い者、劣っている者を相手にして優越感を味わう傲慢な考えだ」

「先生、それは余りではありませんか。そんなことを言うなら先生だつて同じですよ。俺たち頭の悪い学生を毎日怒鳴りつけて、いい気になっているだけじゃないですか」

私は興奮して言い過ぎてしまいました。先生の顔が蒼白になったとき、私はしまった、と思いました。が、もう手遅れです。

「てめえー、てめえつていう奴は、そういう男だったのかあ

」

捨て台詞を残して先生はサッと研究室を出てゆかれました。私はこのとき先生に破門された、と思いました。次の日から私はもう研究室に顔を出すことはできません。仕方なく下宿に閉じ籠って、終日机に向かいます。四年前、寒さに打ち震えながら過ごした信州での日々が思い起されます。

瞬く間に三ヶ月が過ぎて、ついに入試の日が訪れます。二日間のそれが終ると、私はたまたまなく研究室を覗いてみたくなりました。通い慣れた道をたどってキャンパスに入ります。春休みのせいか、学生の姿は殆どありません。しかし、三階の階段を昇りかけたとき、己の体臭のように懐かしい異臭が漂ってきました。そして、研究室は私の実験台に火がついていないほかは三ヶ月前と変わりありません。私は実験操作に没頭している同級生のSに声を掛けました。手を休めた彼と話しているところに先生がやってきます。私は身を硬張らせ、黙って頭を下げました。

「よー、久し振りだなあ。ところでお前、試験受けたかア」
何時もと変らない屈託のない声です。その声につられて、私も自然に話すことができました。

「それで、出来はどうだった？」
「発表になってみなければわかりませんが、まあまあだと思います」

「そうか、合格できるといいがなあ」

数分の会話で頑な心が消えてゆきます。私はその日から再び教室の一員に戻って、夕方の麻雀にも加わるようになります。

それから一週間ほど経った午後のことです。先生が厳しい表情で、教授室に来るようにと言われます。私は、緊張して後に従いました。何時もは開いているドアを閉じられた先生は、私をソファに座らせて話します。

「お前の成績を医学部の教授から聞いてきた。何点だと思っ」

「六割前後として四百二、三十点ぐらいでは」

「馬鹿を言え、三百八十三点だ。今年の合格ラインは六割五分、少なくとも四百六十点以上ないと話にならないぞうだ」

「そうですか。駄目ですか」

「当り前だ。何年も前に習ったことを、今さらできる訳がないだろう」

「いや、受験勉強のスタートが遅すぎました。もっと早くから取り掛かれば、何とかなつた筈です」

「そういう非現実的なことを言うもんじゃやない。この世の中はな、お前中心に回っている訳ではない。いいな、もっと真剣に自分の置かれた立場を考えてみる。お前が望むなら、しばらくこの部屋の研究生として居てもいい。就職したいなら俺にも幾つか心当りがある。たとえ今年は無理であっても、

来年には必ずお前の希望するところを世話してやる。だからな、考え直せ」

「いや、僕は浪人してでも、やっぱり医者になろうと思います」

「これほど俺が言ってもカッ」

「何と言われても、決意は変わりません」

「よし判った。お前の考えはそれとして、お袋さんはどうなんだ。何時までも元気で働ける……という保証は何処にもないんだよ。お前を預かったこの俺が強く反対していることをよく話して、相談してこい」

私はその日の夜行列車に乗ります。丸一日汽車に揺られて、翌日の夕方、仕事に出かける前の母と久し振りに会いました。母は「先生のご意見が大人の考えであり、真剣に心配して下さる人がこの世の中に居ることは本当にありがたい」と何度も言いました。しかし、母は私の我が儘を、それが世間にはとても通用しないものであることを承知したうえで、なお望むのであれば認めてくれると言うのです。私は母に無言で頭を下げ、再び列車に乗りました。そして母が持たせてくれた土産を手に先生のお宅に伺います。

先生は殆んど何も言わずに渋い表情で私の話を聞いていました。私は話すべきことを言い終えると、いたたまれなくなつてすぐにお宅を後にしました。もう先生と親しくお話する

機会は二度とないかもしれません。沈んだ気持で下宿を引き払った私は、一年後の受験のために、東京に身を移しました。

しつとりとした長崎に比べ、東京は何と騒々しい町でしょう。その郷里よりも親しみのある町を離れて、誰よりも尊敬していた先生との喧嘩別れ同然のままの毎日。重い足を引きずるように予備校や図書館を往来する灰色の日々が始まりました。

味気のない一日を終えたある日の夕方、一通の封書が下宿に届いています。少し右肩下がりのけつしてうまいとは言えない文字、一目でそれが先生からのものと判かりました。私は部屋に駆け上がり、胸をときめかせて封を切ります。便箋に薄めの青インクで記された文字。その内容は、人生には決断しなければならぬときがあること。そしてそれは、何度もあることでないこと。一度決断したならば、全力を注がねばならないこと。最後に、身体に十分気をつけるように、とした認めてありました。私は、うれしくて嬉しくて堪りませんでした。その手紙を机の前に貼り付けて、気が緩んだり、怠けそうになったりする度に読み返しては、己を鞭打ちました。定期的にある模擬テストの成績は、その場で破り捨てたいほど悲惨なものでした。しかし、私はそれらを一枚残らず先生に送りました。己を縛りつけるためです。誰一人話し相手

のいない一年を、私はそのようにして歯をくいしばって耐えたのです。

春が来て合格通知を手にすることができたとき、私は真つ先に先生に電話を掛けました。

「そうかッ、合格か。よくやった、よく頑張った！」

先生の大きな声が間近に聞こえてきます。次の言葉はもう声になりません。ただ涙が止め処もなく流れて仕方ありませんでした。

六、

医学部に入ってから、先生のお宅によく遊びに行くようになりました。そこで私は先生の全く違った一面をみて、ビックリしてしまったのです。入学式が済み、新しい下宿の整理も済んだ日曜日が最初でした。無性に先生のお顔が見たくなり、昼過ぎに官舎を訪ねたのです。チャイムを鳴らすと奥から大きな声で「どちら様ですかー」。私が名を告げると「オーッ、錠は掛かっていねえから入ってこい！」

玄関に入った居間にはお姿が見えないので、声のした方を覗きました。ダイニングテーブルに置かれた白木の板に向かつて、先生は無心に彫刻刀を運んでおられます。細い刃先は百合の花を見事に削り出し、周囲には夥しい木屑が散らばっ

ていました。

「ウワー凄いい！ 先生はこんなご趣味をお持ちだったんですか」

「オーッ、いいだろう。休みはこれが楽しみでな」

白木の中央に開いた百合の花、その脇に初々しい蕾が二つ浮き彫りにされています。感嘆して見入る私に、先生は手を休めずに話します。

「美代ちゃんが買いい物に出掛けているからなあ、帰ってきたらコーヒー

でも飲もう。もう少しだから仕上げてしまうぞ」

「えー、どうぞ続けて下さい。見ていると少しも飽きませんから」

暫くして奥様が二人の若い女性を連れて戻ってきました。

「美代ちゃんお帰り。珍しいお客さんが来たよ。私も一息いれるから、コーヒーを淹れておくれよオ」

先生は木屑を払い落としながら居間に出てゆきます。先生が「美代ちゃん」と呼んでおられる夫人と共に台所に立っている三十歳前後の二人は姉妹でしょうか。顔立ちがよく似ています。サイフォンの湯がたぎり、テーブルに五人が揃うと、先生は私を紹介して下さいました。夫人の隣にかけている女性性は教室の先輩で、もう一人はやはり妹ということでした。先生の教室とは関係がないものの姉と一緒に遊びにくる

のだそうです。私はコーヒーを啜りながら、先生の木彫について尋ねました。本来は奥様の趣味だったと姉の方が教えてくれます。彼女の言葉に「今では先生の方が腕を上げられたのよ」と夫人が笑いながら話します。「物を創りだす欲びは何でも同じで、木彫も化学も共通しているよ」と先生。大きなステレオからは、モーツアルトの優しいメロディーが流れています。

次はそれから一ヶ月と少し経ったやはり日曜日で、長崎はもう梅雨に入っていました。その日の先生は、何んと奥様とお二人で刺繍に没頭しておられたのです。大きな布の一隅を丸い木枠にピンと張り、赤い糸を丁寧に刺しています。斜め平行に幾つか針を運び、返してX印にしていくクロスステッチで、小さな花ができてゆきます。テーブルクロスを作っておられるとみえ、刺し終えた部分には色鮮やかな花柄と獅子の模様が描かれています。ご夫妻で手分けをされたとしても、完成までには何ヶ月かかるのでしょうか。指先に神経を集中させて、根気と粘りが要る作業です。

手を休めた先生は家の中にある沢山の作品を見せて下さいました。刺繍にしても木彫にしても目を見張るほど立派で、とても素人の趣味とは思えない出来栄です。子宝に恵まられなかった先生は、きっと奥様のことを思いやり、趣味を共にされたのではないのでしょうか。それにしても先生ほど奥様を

思いやり愛しむ人を、私は見たことがありません。私の母など、男と暮らしていた頃には身体中に痣が絶えないほどひどい暮らしをしていました。母以外にも、私は荒くれた男女を数多く見てきました。ですから先生のお宅にお邪魔したときには、これが本当の夫婦というものかと、それは眩しく映りましたし、私自身も仄々とした気分ほのぼのに包まれたものです。

七、

医学部を卒業した私は、長い間離れていた母の近くで暮らしたいと思い、卒業後の進路は信州大学医学部の内科を選びました。長崎を発つ前の日に先生のご媒酌で結婚した妻と共に自宅に挨拶に上がりました。私が松本に居を構えることを話しますと、先生は「松本に行ったら必ず寄るからな」と楽しみに言われます。そして、旧制松本高校の学生であった頃に槍や穂高をよく歩いたものだと言葉を輝かせて話されます。若い頃の話は滅多にされない先生ですが、信州で過ごした三年間は余程心に残っておられるのでしょうか。私が教室に入ってから、何度もお聞きしたことがあります。しかし、その後、東大に進まれてからのことは一度も耳にしたことがあ

りません。

私が信州で暮らすようになって五年目の夏に、先生は学会で数名の教員や大学院生を連れて松本に來られました。私は休暇を取って、学会場をひとり抜け出された先生を、車で案内します。助手席に座られた先生は「すべてが変わり果て、昔の面影は全くない」と言われます。ただ、美ヶ原に向かう車窓から眺めた北アルプスの山並みに「この雄姿だけは少しも変らないな」と感慨深い面持ちです。

楽しく過ごした数日が過ぎ、一行より一足早く帰られる先生を、私は妻と共に見送ります。駅のホームで三歳になる私の長男と一歳の長女を、あたかも自分の孫のように抱き上げて、別れを惜しんで下さいました。私も学会などで九州に行ったときには必ず長崎に立ち寄り、先生や奥様にお目にかかることが楽しみでした。

三年前の一月には、先生の還暦のお祝いが長崎の駅前にそり立つ丘の上のホテルで開かれました。その会には妻とともに出たかったのですが、子供たちの学校もあり、私一人が出席しました。教室で先生の教えを受けた学生は二百数十名、そのうちの約半数が全国から集まりました。還暦祝いの赤いガウンを肩にニコニコ顔の先生と、その隣の奥様はとても幸せそうです。私も、先生に人一倍心配をお掛けしたことで遠方からの参加ということで、スピーチをさせていただきまし

た。学生時代と同じように強がりしか言えない私は、意味のないことをがなりたてます。先生はマイクの音に負けないほどの大声で、私の一言ひとことにその都度「オーツ、オーツ」と応えて下さいます。

そして、その会場に集まった者たちは、五年後に予定されている先生の最終講義を皆で聴いて、盛大なお祝をすることを互いに誓い合って別れたのです。

しかし、その退官の祝賀会を迎えることなく悲しい訃報が届きます。その日、私は学会で京都に出かけていました。夜遅くにSから家に電話があり、翌朝の六時に妻から宿に報告が入ります。その日の予定は一般演題の発表がありました。発表後に移動すれば葬儀に間に合います。夕方の五時、発表を終えた私は一目散に大阪空港に向かいます。そこから空路福岡に入り、翌朝一番の列車で長崎に向かいました。

その時の私は、大きな学会場で自分が霞んでしまわないようにと、普段は滅多に身につけない派手なスーツを着ていました。このような出で立ちで先生の野辺の送りに参列することとはとても気がひけます。でも、もう一度先生にお会いしたい一心で、斎場へ駆け込みました。

そこには学生時代の懐かしい顔や声が溢れていました。誰に促されたのか定かではありませんが、私は地下の霊安室に降りて行きます。そこに安置された白い柩に奥様がピタリと

寄り添って、涙にくれておられます。私は奥様に黙礼して、固く目を閉じられた先生にお目にかかりました。心筋梗塞で倒れてから僅か四日で息を引きとられた先生のお顔はとてもしきれいで、安らかでした。

医学部の中堅医師になっていた私のスケジュールは過密で、新学期とも重なっていましたから、殆んど隙間がないほどタイトでした。その私が、京都に出かけていたときに訃報が届いたから、先生に最後のお別れをすることができました。先生が私を呼び寄せて下さったような気がしてなりません。

すぐに出棺のときがやってきました。奥様が脇の鉢植えの牡丹を指して尋ねます。

「主人が丹精を込めて咲かせた花ですから一緒に入れてもいいですか」

周囲の同意を得た奥様が純白の大輪を手折り、先生のお顔に添えられます。その棺が閉じられ、黒い小石で釘を打ちます。私も隣の人に促されて、小石を握りました。

上の齋場には数百名の弔問客が訪れていて、空席は余りありません。一人場違いな出で立ちの私は、一番後の隅に席を取りました。読経の後で弔辞が述べられます。私が教室にいたときには助教授であった学部長のF教授です。

先生の死が余りに急であったこと。東京から来られたのは先生が三十一歳の時で、戦後間もない長崎の町は瓦礫の山で

あったこと。そこで先生は新進気鋭の教授として、校舎や施設を拡充し、多くの学生を育てたこと。私が在学していた時に勃発し、その後も長く続いた大学紛争では難問解決に奔走し、学長代理まで務められたこと。沢山の学生たちに慕われたこと。奥様を限りなく愛されておられたこと……。

途切れとぎれになりがちな弔辞に私は涙が溢れてきます。齋場にも嗚咽が波のように拡がり、うねっています。F教授の長い弔辞が終わりました。彼は溢れる涙を拭いながらそれを靈前に奉げます。次に友人代表の弔辞が始まりました。同じ官舎に住んでいた工学部の教授です。F教授ほどではありませんが、やはり言葉が詰ります。

「先生は休日や正月の休みには若い人たちに声を掛けて、よく麻雀をなさっていました。私も声を掛けられてよくお邪魔したものです。先生が麻雀をなさっているときは熱中して大きな声を出され、負けたときには口惜しがり、とても楽し気に見えます。しかし、先生は本当にこの遊びに熱中されていたのでしょうか。私にはそう思えないのです。それは先生の気晴しであり、暇つぶしであったことも確かですが、それだけではないことが判ってきたように思います」

会場に流れる弔辞は、私が先生に抱いていた印象とよく似ています。

「先生は若い人たちを集めて可愛がりたくても酒を酌み、人

生を語り哲学を語るといふようなことは照れ臭くてできない方であつたと思います。若い人たちを招いて夕食を御馳走したり洋酒を振舞つたりするための一種の口実が『おい、麻雀やろう』であつたと思います。勝つてははしゃぎ、負けては惜しがるように見えても、それは先生流の表現であつたと思ふのです。

そういう先生の時おり見せる横顔には、特に若い人たちを帰した後の顔には、何か触れてはいけないものが浮かんできました。先生のお宅に集まつていた諸君は、そのような顔を見たことがあつたでしょうか……」

深い悲しみにくれる斎場の隅々にまで流れる声、その静かな言葉に耳を傾けながら、私は大きく頷きました。先生は人前で豪放に振舞つておられました、それは若い人たちに對する演技、見せかけの姿に違いありません。その奥に、何人たりとも触れてはならない何かがありました。

私は止まることのない涙を拭いながら、それが一体何であつたのか、ひとり考えていました。

八、

夕暮れと共に、あちらこちらの小路から次々と船が出てきます。広い電車通りはもう船と人とで一杯です。

バババババババツ、バババババババツ……

精霊船が思うように進めなくなると、爆竹が一段と激しく作裂します。先生の御船にも^{さる}筈に一杯の爆竹が積まれています。学生たちがそれを鷲掴みにして、隣の船に負けじと火をつけます。

バババババババツ、バババババババツ……

暗闇に青白い閃光を放ち、足許で、頭上で、そして脇をゆつくりと走る車の屋根でも、狂つたように弾けています。私は耳を押さえつけ、耳栓を目いっぱい奥に詰めました。しかし、けたたましく弾ける音は絶え間なく脳天に響いてきます。ふと、香炉の線香が気になりました。私は御船の前に出てみます。

「アーツ、何つてことを！」

私は思わず叫び声をあげました。香炉に氷が、幾つもの氷が山のように詰まつています。

「誰だ、こんなことをする奴は！ お前か、それともお前か？」近くにいた学生の顔を睨みつけ、私はそう叫びかけました。しかし、私は思い留まります。例え叫んだとしても、爆竹の音で私の声は掻き消されてしまうでしょう。それに、先生のお声が聞こえたような気がしたのです。

「なあお前、いいじゃねえかよオ。若い学生のやることだか

ら大目にみてやれよ。それに俺だってよ、線香臭いのは好きじゃねえからなア」

街灯の明かりで仄かに浮かぶ遺影がそんな風に話しているようです。それにしても先生、学生たちは何と節操がないのでしょうか。先生の御霊の送りと遊びとの区別がつかないのですから……。

南に向かう通りの片側に、船が隙間なく並んでいます。時折、前に進むほかはまったく動くことがありません。出発してからもう何時間経ったのでしょうか。夕方にはあれほど軽かった足が、いまは棒のように固く、鈍い痛みも感じられず。絶え間ない爆竹の音もさ程気にならなくなりました。きつと、鼓膜が麻痺してしまつたのでしょうか。私は長旅のせいもあつてか、ひどい疲れを覚えました。動かない船縁に両手を掛けて重い体を引き上げ、船縁に腰を掛けます。

一段と高いそこからは、暗い道路に延々と列なつた精霊船がよく見えます。遙か前方、右手の通りからは稲佐山方面からの船が合流してきます。あの合流点を通過するには、あとどれ位かかるのでしょうか。

突然、首筋から背中にかけて鋭い痛みが走ります。次々と投げ上げられる爆竹の一つが、私の襟に入ったのです。背中を紫の炎が這い回ります。私は宙に飛び上がり、そのまま地

面に崩れ落ちました。

「先生、許して下さい。先生の御船に腰なぞ掛けたから、罰が当たってしまいました」

私は、余りの痛さに吹き出した汗と涙を拭いながら、心の中でそう叫びます。

熱い痛みには耐えられず、私は船の後に行ったり前に回ったり。背中のやけどに法被が当たらないようにと胸を反らせて歩き廻ります。船が少しだけ進みます。今度は船縁にしっかりと手を掛けて、力一杯押しました。足の痛みは消え去って、今はもうすっかり元気を取り戻しています。

しかし、船はすぐに止まって、長いあいだ動きがありません。

「一服どうだい」

眼を挙げると、Sが煙草を差し出しています。私のそれは出発して間もなく切れてしまい、暫く吸っていません。私は一本を抜き取り、火を点けました。煙をフーツと吐きながら、私は呟きます。

「それにしても先生には、どうしても分からない部分がある。先生をよく知っている人たちにも聞いたけど、誰もが言葉を濁してしまふ……」

「ああ、東大時代のことだろう」

私は、Sの顔を凝視しました。ネオンサインの弱い光を受

けて、彼の顔が青白く浮き上がります。

「先生はね、徴兵検査の前に一週間断食をしたうえに、醬油を一升飲んだ男さ」

私はその言葉に打ちのめされました。虚ろな私の頭蓋の中を閃光が、走り抜けて行きます。

それは、私が卒業間際に医者になりたいと言いつつ出したときのことです。先生は、私の生い立ちについて尋ねられました。何も知らない私は、父のことを平気で話しました。

「もし父が黙って戦争に行き、戦死などしなかったら、僕の人生は違っていた。きっと、こんな愚かなことを言い出しはしないですよ。もつと真つ直ぐな道を歩ける筈だったけど、僕は戦争孤兒だから、どうせ馬鹿な生き方しかできないですよ」

そう、先生に捨て鉢な言い方をしてしまったのです。そのとき先生のお顔はピクツと動き、すぐに青さめていきました。私が驚いて「大丈夫ですか？」と尋ねると「ちよつと血圧が高めでな、狭心症もあるものだから」と力なく言われます。

ああ、何と悪いことを言ってしまったのでしょうか。何も知らない愚か者が！先生の命とりになった心筋梗塞の病状を、この私も悪くさせ、命を縮めさせた一人だったのですね。どうか許して下さい！

私は先生の御船に両手を掛けて、深く頭を下げました。唇

を固く噛み、心の中で何度も許しを乞いました。

船が動き始めます。西から流れてくる船との合流点を過ぎると、ゆっくりではありますがもう滞ることはありません。

駅前を通り過ぎ、波止場が近づいてきました。爆竹はいまも同じように鳴っているに違いありません。青白い炎が作裂し続け、路面には破片が雪のように積もっています。しかし、それらの音も私にはもう音として聞こえなくなりました。先生の御霊が安らかでありますようにと、唯、ひたすら祈るばかりです。

ついに港が見えてきました。ここで、先生の御霊ともお別れになります。先に着いた船の一つひとつに火が放たれて、海に浮いていきます。いよいよ先生の御船が棧橋の先端に着きました。送りの途中で、休んでおられた奥様をお迎えします。その奥様が細い手で点けた小さな炎を、先生の御船に移します。少し油を撒いた船から大きな燈色の炎が立ち昇ります。舳先の遺影が一瞬赤く映えて炎に包まれました。それを合図にワツと掛け声があがって、一気に船が前に進みます。舳先がガクツと下を向き、飛沫を上げて海に浮かびました。赤い火の粉が飛び上がり、暗い夜空に散って行きます。燃え盛る先生の御船は、ゆっくりゆっくり沖に向かって流れます。真黒な海面に数え切れないほど多くの炎が揺れています。すでに炎は消え去って、光の塊となって揺れているものも見ら

れます。それらの中で一際熱く燃え盛るのは、間違いなく先生の御船です。

「停年になったら東京に帰って好きなことをして暮らすんだ」

先生がよく口にされたお言葉です。若い独身の日にこの町に來られて以來死を迎えるその日まで、この町を離れることのなかった先生ですが、決してこの町に溶け込み、同化しようとはされませんでした。しかし、東京に出掛けられることも余りなく、そこに住む友とも滅多にはお会いにならなかった先生は、この長崎で一体何をされたのでしょうか。

この昭和の前半に吹き荒れた嵐のような暗黒の日々に、国家の命に背いて己の信念を貫かれた先生の生き方、それは想像を越えた勇氣と決断であったことでしょう。死にも等しい、いやそれ以上の苦しみであったに違いありません。そして、誰にも称賛されることなく、『非国民 人でなし』と罵られ、『石持て追われる者』の辛い日を耐え忍ばれたに違いありません。その苦悩に満ちた先生は、大好きだった東京を離れて、原爆で瓦礫の山と化したこの町に立ち、ここで賽の河原の石積みをされたではありませんか。決して避けることのできなかった、あの不幸な日の贖罪をされ続けたではありませんまいか。

でも先生、どうか心安らかにお眠り下さい。先生が積まれ

た石の一つひとつは、決して無駄になることはありません。それらは、どれ一つとして余すところなく、先生の教えを受けた者の胸に生き、生命となつて、今も熱く生き続けます。いいえ、先生に薫陶を受けた私共に留まることはありません。先生が楽しく過ごされたという松本の地で、私は先生に教えて頂いたそのやり方で、人の道を、人の心を若い人たちに語り伝えましょう。そして私の息子や娘や、次の世代を担う沢山の子供たちにも。

暗い港に揺れる無数の光の塊は、この世に生きた人々の尊い生の証でしょうか。遙か彼方の星のように淡い光は、南の孤島で死んでいった私の父のそれですか。「バチバチッ」と大きな音をたてて火の粉を舞い上げたのは、先生の御船でしょうか。いまはもう、それも定かではありません。

— 一月七日 昭和の終る日に —